

## 中学生のハーディネスが友人に対する感情と 友人適応に及ぼす影響

金森 美佳\* 鷺津 智恵子\*\* 五十嵐 哲也\*\*\*

\*清洲市立新川小学校

\*\*清林館高等学校

\*\*\*養護教育講座

### Effects of Hardiness on Friendships among Junior High School Students

Mika KANAMORI\*, Chieko WASHIDU\*\* and Tetsuya IGARASHI\*\*\*

\*Shinkawa Elementary School, Kiyosu 452-0905, Japan

\*\*Seirinkan High School, Tsushima 496-0805, Japan

\*\*\*Department of School Health Sciences, Aichi University of Education, Kariya 448-8542, Japan

#### I 問題と目的

近年、暴力行為、いじめ、自殺、不登校など子どもたちの心の健康問題が増加しており、学校においても、学業、友人関係、教師との関係、家庭環境など様々なストレスが子どもたちを取り巻いている。特に中学生では「友」が最も大きなストレスである(右高, 2009)と言われている。ところが、同じストレスに対して、個々人が示すストレス反応には大きな差がみられる。この違いを生み出す要因の一つとして、米国を中心にハーディネスが研究されている。

Kobasa (1979) は、高ストレス下においても健康を保っている人々が持っている性格特性をハーディネスと称し、個人が自らと環境との関係をどのようにとらえるかによってストレス反応の程度が決定されるとした。また、ハーディネスは一貫して3要素(コミットメント、コントロール、チャレンジ)が高いとされている。さらに、Maddi (2002) は、これらの3要素のどれか一つだけではストレスフルな出来事を有利な方向に変化させることはできないと主張している。Orr & Westman (1990) は、ハーディネスについて以下のように説明している。コミットメントとは、自分が誰であり、何をしているかについての信念であり、自分自身や仕事や家族、対人関係、社会組織などの人生の様々な状況に対して、自分を十分に関わらせている傾向である。コントロールとは、個人が出来事の推移に対してある一定の範囲内で影響を及ぼすことができると信じ、かつ、行動する傾向であり、責任感を含むものであるが、他者への操作は含まれない。そして、チャレ

ンジとは、毎日の生活において、安定性よりも、むしろ変化が人生の標準であり、成長の機会であると捉える信念に基づいている。また、小坂(1992)は、ハーディネスは、ストレスフルな現状に柔軟に対応している活発な性格特性であると述べている。

また、ハーディネスは、中学生にとってもストレス低減効果があることが確認されている(稲葉・森・五十嵐, 2010)。子どもたちに何らかの大きなストレスが生じていても、その影響を軽減できる性格特性を予防教育により育成できれば、友人関係からくるストレスを低減させ、心身に不調を感じることなく生活できると考えられる。しかし、ハーディネスが、中学生にとってストレスを感じやすいと言われる「友人関係」のどのような側面に、どのような影響をもたらすのかという点に関しては、現段階では研究されていない。また、稲葉・森・五十嵐(2010)の研究では、初めて中学生用のハーディネス尺度が作成されたが、本来3因子構造であるべきところが2因子構造となり、有用な尺度の作成には至らなかったため、今一度、有用と言える尺度の作成に取り組む必要がある。

ところで、中学生という時期は、第二次性徴を迎え、小学生の時に比べ、様々な生活場面における変化を体験しやすいことから、心理的に不安定になりやすく、悩みを抱えやすいことが指摘されている(澤田, 1995)。また、これまでの依存的で親中心であった対人関係から、友人関係を中心とした対人関係に移行する時期であり、そこで作られた関係性は精神的な自立へと結びついていく。このような親からの独立や心身の変化には、不安や葛藤が伴い、悩みや考えを語り

合う同世代の友人が必要になる(稲葉・森・五十嵐, 2010)。そうして友人と過ごす時間が多くなる中で、集団の中での自己を意識し、友人に対して様々な感情を抱くようになる。榎本(1999)は、青年期では友人に対し「信頼・安定」、「不安・懸念」、「独立」、「ライバル意識」、「葛藤」の5つの感情を抱いていることを明らかにした。そして、中学生は特に「ライバル意識」、中でも女子は「不安・懸念」の感情を友人に抱きやすいことが分かった。思春期になり、他者を意識する中で、複雑な感情を抱き、友人関係においてつまずきを感じていると考えられる。加えて、中学生では「友」が最も大きなストレスである(右高, 2009)ことから、友人関係におけるストレスは、友人に対する不安定な感情によって、より深刻化すると考えられる。

ハーディネスを育成することは、このような友人関係のつまずきを軽減するのに有効であると考えられる。なぜならば、ハーディネスは、ストレスフルな現状に対して柔軟に対応していける活発な性格特性であり、ハーディネスが高ければ、個人は自らと環境との関係を良い方向にとらえることができると考えられるからである。中学生においても、他者を意識して抱いてしまう不安定な感情を良い方向に変えることができると考えられる。以上より、ハーディネスと友人に対して抱く感情の関連を考察することは、中学生の友人関係に対する援助において、有意義な示唆が得られるものと考えられる。

また、友人と最も長い時間をともに過ごす環境は、学校である。大久保(2005)は、友人関係の適応状態が、学校生活の適応感に大きな影響を与えていることを指摘している。さらに、人間関係への適応感が強い中学生は、学校嫌い感情(古市, 1991)、欠席願望(本間, 2000)が低いという結果も得られている。友人関係のつまずきを軽減するための方策としてハーディネスを取り上げるのであれば、友人に対する感情との関連を見ていくと同時に、それが友人適応にどう繋がっていくのかを考察することも必要だろう。

以上のように、中学生にとって友人関係は重要であり、そこから生じるストレスも大きい。しかし、現段階では、ストレスを軽減できるハーディネスと友人に対する感情、友人適応についての関係は明らかにされていない。ハーディネスという性格特性が友人に対する肯定的な感情を強くできるとしたら、友人適応が高まり、友人関係は良好になると考えられる。このことが分かれば、ハーディネスを育成することが、学校生活への適応に苦しんでいる子どもたちを救う新たな支援に繋がると言えよう。

したがって、本研究では、友人関係が精神面に大きな影響を与えると考えられる中学生を対象として、ハーディネスに注目し、ハーディネスが友人関係の感情的側面と、友人適応にどのように関連しているのか

を明らかにする。しかしながら、中学生に有用なハーディネス尺度は作成されていない。そこでまず、本研究では多田・濱野(2003)の15項目版ハーディネス尺度を元にして新たに中学生用ハーディネス尺度を作成し、信頼性と妥当性を検討することを第1の目的とする。

また、ハーディネスと、友人に対する感情、友人適応にはどのような関係があるのかについても、いまだ明らかにされていない。この点から、ハーディネス特性が友人に対する感情にどのように影響を及ぼし、友人適応感を抱かせるのかを明らかにすることを第2の目的とした。これにより、ハーディネス特性を育成することが、どのような感情を抱かせ、どのように友人関係を良好にしていくのかを考察する。

## II 方法

### 1. 調査対象

A県内の公立B中学校1年生、男子76名、女子85名、計196名、及び公立C中学校1年生、男子106名、女子124名、計249名を調査対象とした。

### 2. 調査時期と手続き

2011年10月に実施された。各学級で学級担任が一斉に実施し、その場で回答・回収された。回答は無記名で行われ、本調査が研究のためのみに使用されることが伝えられた。

### 3. 調査内容

フェイスシートで性別、学年について尋ねた後、以下の項目について回答を求めた。

#### (1) ハーディネス

先に述べたように、多田・濱野(2003)の作成した15項目版ハーディネス尺度の項目を参考に、中学生用ハーディネス尺度を構成することとした。そのため、2011年9月下旬に、中学校教員3名(女性3名、平均年齢46.0歳、平均経験年数18.0年)を対象として、多田・濱野(2003)の作成した15項目版ハーディネス尺度の項目を中学生にも適用できるかどうかを検討するための予備調査を行うこととした。調査では、多田・濱野(2003)の15項目について、中学生のハーディネス尺度としてふさわしいか否か判断してもらい、「A: このままの文章でよい」「B: 改善したうえで項目にすべき」「C: 中学生に適切でない項目」の3つから選択してもらった。Bと選択した場合には、改善案を記入してもらった。結果については、3名の調査対象者の判断について、「A: このままの項目でよい」「B: 改善した上で項目にすべき」「C: 中学生に適切でない項目」とし、2名以上がAとしたものはそのまま採用し、それ以外については、調査対象者に記入してもらった

改善案を検討することとした。

その結果、「アルバイトや仕事は変化があるほうが好きだ」については、アルバイトという行為が中学生にとって馴染みがないとして、全員がCと判断したため削除した。また、それ以外のいくつかの項目において改善案が示された。「目新しくて変化に富んだ色々なことをしてみたい」について、記述された意見を見ると「目新しくて変化に富んだ」という表現が中学生にとって難しいため、「新しくて変化が多い」という表現に改善すべきというものであった。「できれば様々な経験をしてみたい」については、「様々な」を「色々な」にしたほうがよいという指摘があったため、修正した。「どんなことでも最善を尽くせば、最終的にうまくいく」については、「最善」を中学生にも分かりやすい「全力」という表現にした。「毎日の生活は単調で張りがない」は、「単調で張りがない」という表現を「変化がなくつまらない」に修正した。「自分の勉強を本当に楽しみにしている」については、意味が分かりにくいという指摘があり、「自分がやりたいことを勉強するのは、本当に楽しい」という表現に改めた。それ以外のものは、そのまま使用した。

以上より、本調査においては、予備調査を受けて一部修正された14項目を用いることとした。「あてはまらない」「あまりあてはまらない」「すこしあてはまる」「あてはまる」の4件法である。

### (2) 友人に対する感情

榎本(1999)の「友人関係の感情的側面」尺度を用いた。本尺度は、「信頼・安定」「不安・懸念」「独立」「ライバル意識」「葛藤」の5つの因子からなる合計25項目で、十分な信頼性が確認されている。「全くそう思

わない」「あまりそう思わない」「すこしそう思う」「強くそう思う」の4件法である。

### (3) 友人適応

友人に対する適応を調べるために、本間(2000)の「学校での対人適応」尺度のうち、「対友人適応」のみを使用した。本尺度は、合計5項目からなる。「全くそう思わない」「あまりそう思わない」「すこしそう思う」「強くそう思う」の4件法である。

## III 結果

### 1. 中学生用ハーディネス尺度の構造

因子分析に先立ち、14項目の信頼性を検討するために $\alpha$ 係数を算出したところ、 $\alpha=.82$ であった。しかし、「自分には打ち込めるものがない」「毎日の生活は変化がなくつまらない」において、項目を削除した場合の $\alpha$ 係数が高かったため、この2項目を削除することとした。そこで、計12項目による因子分析を実施することとした。

その結果、共通性.20以下かつ因子負荷量.40以下の項目が認められたため、3項目(「楽しめる趣味を持っている」「生きがいを感じているものがある」「自分がやりたいことを勉強するのは、本当に楽しい」)を削除した。その上で、9項目による因子分析(主因子法・プロマックス回転)を再度実施した(Table 1)。その結果、固有値1以上の基準で2つの因子が抽出された。

第I因子は、「新しくて変化が多い、色々なことをしてみたい」「スリルのある活動や冒険的な行為は好きだ」など4項目から成っている。その4項目に共通するのは、日常生活の刺激や変化を好む姿勢である。

Table 1 中学生用ハーディネス尺度の因子パターン(主因子法, プロマックス回転後)

	因子負荷量		共通性
	I	II	
因子I: チャレンジ ( $\alpha = .71$ )			
新しくて変化が多い、色々なことをしてみたい。	.69	.02	.49
スリルのある活動や冒険的な行為は好きだ。	.62	-.01	.38
興奮したり、わくわくすることが好きだ。	.58	-.13	.26
できれば色々な経験をしてみたい。	.57	.15	.45
因子II: コントロール ( $\alpha = .79$ )			
努力すればどんなことでも自分の力のできる。	-.21	.83	.53
どんなことでも全力を尽くせば、最終的にうまくいく。	.04	.69	.52
一生懸命頑張れば、必ず目標は達成する。	-.01	.69	.47
一生懸命話せば、誰にでもわかってもらえる。	.20	.48	.38
計画を立てたら、それを実現させる自信がある。	.22	.43	.35
因子間相関	.48	***	

\*\*\* $p < .001$

Table 2 ハーディネスと友人に対する感情、友人適応の相関

	信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤	対友人適応
チャレンジ	.39***	.00	.31***	.12*	-.16***	.37***
コントロール	.45***	-.13**	.31***	.14**	-.14**	.37***

\* $p < .05$  \*\* $p < .01$  \*\*\* $p < .001$

Table 3 友人に対する感情と友人適応の相関

	信頼・安定	不安・懸念	独立	ライバル意識	葛藤	対友人適応
信頼・安定	—	-.22***	.41***	.00	-.37***	.76***
不安・懸念		—	-.25***	.35***	.49***	-.17***
独立			—	.01	-.22***	.33***
ライバル意識				—	.39***	-.01
葛藤					—	-.34***
対友人適応						—

\*\*\* $p < .001$

第Ⅱ因子は、「一生懸命頑張れば、必ず目標は達成する」「計画を立てたら、それを実現させる自信がある」など5項目から成っている。この5項目に共通するのは、個人が出来事の推移に対して影響を及ぼすことができると信じる性質である。

これらは、多田・濱野（2003）の作成したハーディネス尺度の「チャレンジ」、「コントロール」の構造と同一であったため、第Ⅰ因子「チャレンジ」、第Ⅱ因子「コントロール」と命名した。

各下位尺度得点は、各因子の総得点を項目数で除して算出することとした。その上で、中学生におけるハーディネス尺度の信頼性を検討するため、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出した（Table 3）。その結果、「チャレンジ」では $\alpha=.71$ 、「コントロール」では $\alpha=.79$ であり、十分な内的整合性が確認された。なお、各下位尺度の記述統計量は、チャレンジで $M=3.26(SD=.58)$ 、コントロールで $M=2.70(SD=.62)$ であった。

## 2. 各尺度の性差

ハーディネス、友人に対する感情、友人適応の各下位尺度における性差について検討するために、 $t$ 検定を行った。

その結果、ハーディネスについては、チャレンジ( $t[389]=1.01, n.s.$ )、コントロール( $t[389]=.96, n.s.$ )のいずれの下位尺度にも性差は認められなかった。

友人に対する感情については、女子は男子よりも不安・懸念( $t[389]=4.47, p<.001$ )が強いことが示された。しかし、信頼・安定( $t[389]=1.54, n.s.$ )、独立( $t[389]=1.32, n.s.$ )、ライバル意識( $t[389]=1.21, n.s.$ )、葛藤( $t[389]=.31, n.s.$ )では、有意差は認められなかった。

友人適応については、女子の方が男子よりも友人適

応が強いことが示された( $t[389]=2.63, p<.01$ )。

## 3. 各尺度の関連性

本研究では、ハーディネスが友人適応にどのように影響を及ぼすかを検証することが目的である。また、その適応状態が友人に対する感情の違いによってどのように異なるのかを明らかにすることも目的としている。そのためには、各下位尺度間の相関関係を検討しておく必要がある。そこで、ハーディネスと友人に対する感情の下位尺度、ハーディネスと友人適応、友人に対する感情と友人適応について、Pearsonの積率相関係数をまとめた。

### (1) ハーディネスと友人に対する感情 (Table 2)

友人に対する感情の下位尺度ごとに検討した結果、チャレンジについて、信頼・安定( $r=.39, p<.001$ )、独立( $r=.31, p<.001$ )との間で、弱い正の相関がみられた。ライバル意識( $r=.12, p<.05$ )との間では、弱程度ながら有意な正の相関が示された。葛藤( $r=-.16, p<.001$ )との間では、弱程度ながら有意な負の相関が示された。不安・懸念( $r=-.00, n.s.$ )の間には、有意な相関はみられなかった。

コントロールについて、信頼・安定( $r=.45, p<.001$ )との間で、比較的強い正の相関がみられた。独立( $r=.31, p<.001$ )の間には、弱い正の相関が示された。ライバル意識( $r=.14, p<.01$ )の間には、弱程度ながら有意な正の相関が示された。不安・懸念( $r=-.13, p<.01$ )と葛藤( $r=-.14, p<.01$ )の間には、弱程度ながら有意な負の相関が示された。

### (2) ハーディネスと友人適応

チャレンジと友人適応の間には、弱い正の相関が示された( $r=.37, p<.001$ )。また、コントロールと友

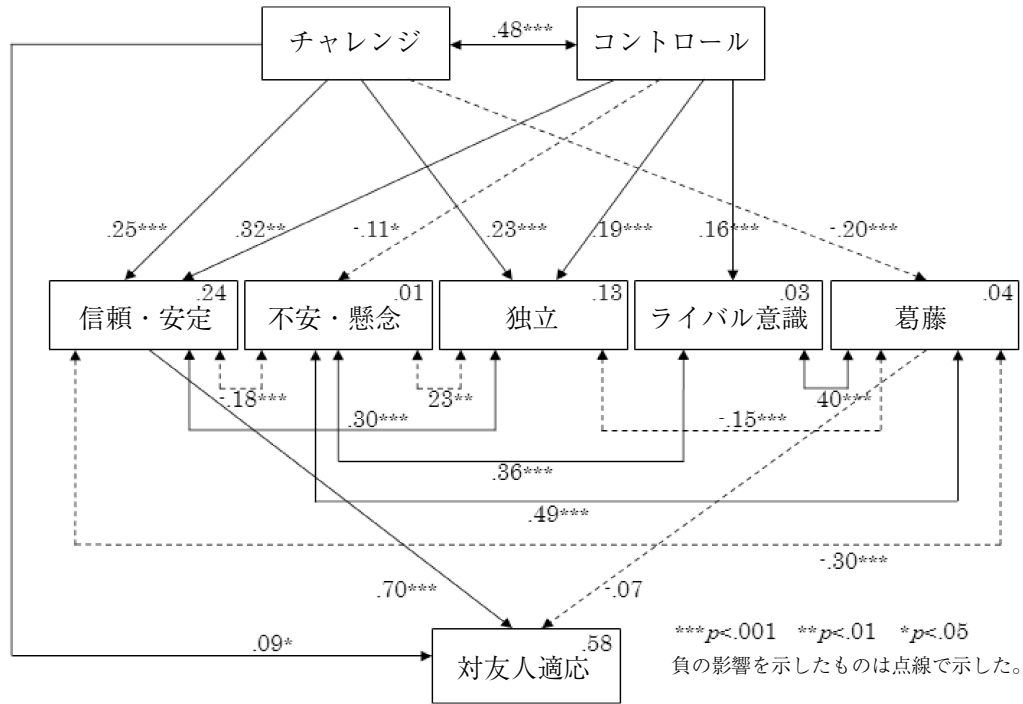


Figure 1 ハーディネスが友人に対する感情を介して対友人適応に及ぼす影響

人適応との間にも、弱い正の相関が示された ( $r=.37, p<.001$ )。

(3) 友人に対する感情と友人適応 (Table 3)

友人適応と不安・懸念 ( $r=-.17, p<.001$ ) との間には、弱程度ながら有意な負の相関がみられた。独立 ( $r=.33, p<.001$ ) との間には、弱い正の相関が示された。葛藤 ( $r=-.34, p<.001$ ) との間には、弱い負の相関が示された。また、信頼・安定 ( $r=.76, p<.001$ ) との間では強い正の相関が示された。ライバル意識については、有意な相関はみられなかった ( $r=-.01, n.s.$ )。

4. ハーディネスと友人に対する感情が友人適応に及ぼす影響

以上を踏まえ、ハーディネスという特性が友人に対する感情にどう影響し、それが最終的に友人適応にどう影響を及ぼすのかという、ハーディネスの友人適応への間接的・直接的な影響を検討するため、共分散構造分析を行うこととした。

性格特性であるハーディネスは、友人に対して抱く感情に影響を及ぼすと推測される。そして、友人に対してどういった感情を抱くかということが、友人適応に影響を与えると考えられる。このような仮説のもとに因果関係を仮定し、モデルを作成した。

はじめに、観測変数同士を仮定できる全てのパスで結び、モデルの分析を行った。しかし、このモデルの適合度指標において、十分なモデル適合を示していなかった。そのため、因果係数の小さいパスを10%水準で除去し、改良を繰り返した。その結果、適合度指

標が、 $GFI=.995, AGFI=.981, NFI=.992, CFI=1.00, RMSEA=.000$ となり、十分なモデル適合を示したと考えられたため、Figure 1のモデルを採用した。

その結果、チャレンジから信頼・安定、独立、葛藤、友人適応への影響が示された。コントロールからは、信頼・安定、不安・懸念、独立、ライバル意識への影響が示された。友人に対する感情では、信頼・安定、葛藤から、友人適応への影響が示された。さらに、チャレンジとコントロール、信頼・安定と不安・懸念、独立、葛藤、不安・懸念と独立、ライバル意識、葛藤、独立と葛藤、ライバル意識と葛藤に共分散が示された。

IV 考察

1. 中学生用ハーディネス尺度について

本研究の目的は、中学生用ハーディネス尺度について検証し、それを使用してハーディネスが友人適応にどのような影響を及ぼすのかを検討することであった。

まず、ハーディネス尺度は、多田・濱野 (2003) の作成した15項目版ハーディネス尺度を用い、それが中学生にも適用できるのかを予備調査を行い検討した。この尺度は、信頼性が高く有用である (堀越・堀越, 2008)と指摘されている。その結果、本研究では、「チャレンジ」と「コントロール」の2因子が抽出された。多田・濱野 (2003) のハーディネス尺度に関する研究では、「チャレンジ」、「コントロール」、「コミットメント」の3因子からなるハーディネス尺度を開発

している。この研究では、第Ⅰ因子は「目新しく変化に富んだ色々なことをしてみたい」、「興奮したり、わくわくすることが好きだ」等の日常生活の刺激や変化を好む項目から構成されており「チャレンジ」と命名された。第Ⅱ因子は「どんなことでも最善を尽くせば最終的にうまくいく」、「努力すればどんなことでも自分の力でできる」等の日常生活の出来事に対して個人が影響を与える項目から構成されており、「コントロール」と命名された。第Ⅲ因子は、「生きがいを感じているものがある」、「楽しめる趣味を持っている」等の自分の人生に対する存在意義を認め、充実感を示す項目から構成されており、「コミットメント」と命名された。本研究で抽出された2因子は、この第Ⅰ因子、第Ⅱ因子と構造が同一であったため、それぞれ「チャレンジ」、「コントロール」と命名した。

これまでのハーディネスに関する研究で、チャレンジとコントロールの2因子構造のハーディネス尺度で研究されているものは井上・相模（2005）の研究がある。他にも2因子構造のハーディネス尺度に関する研究があるが（河嶋・東條・松岡・田中，2001；稲葉・森・五十嵐，2010），いずれも「ポジティブ思考」「コントロール可能感」と命名している。しかし、その他の研究（多田・濱野，2003；堀越・堀越，2008）においてはチャレンジ、コントロール、コミットメントの3因子構造で行われている。本研究では2因子が抽出され、これまでのハーディネス尺度で使用されてきた3因子のうちコミットメントが削除される結果となった。中学生を対象とした先行研究（稲葉・森・五十嵐，2010）でも、コミットメントの項目が他の因子に分かれた2因子構造のハーディネス尺度が作成されていることを考えると、今回の結果は妥当だと言える。しかし、今回はコミットメントがどの因子にも負荷を示さず、因子自体が抽出されなかった。

このような結果になった背景として、ハーディネスの中の「コミットメント」の定義は、中学生に適用しにくいものであったことが考えられる。Orr & Westman（1990）は、コミットメントについて、自分が誰であり、何をしているかについての信念であり、自分自身や仕事や家族、対人関係、社会組織などの人生の様々な状況に対して、自分を十分に関わらせている傾向であると説明している。中学生期は、1個の独立した人格としての自己を形成していく目覚めの時期（久世・原田・後藤・宮沢・二宮，1982）であり、自分が誰であり、何をしたいのか考えることがまだ出来ていないと考えられる。また、井上・沖・林（2004）は、学校社会の中で子どもたちは常に心理的・身体的制約を受けており、真に主体的であることは難しいと述べている。中学生は義務教育の段階であり、自分の意思で勉強したり、活動したりしているという意識が低いと考えられる。すなわち、自分自身を周りに関わらせてい

るという感覚が乏しいと言える。そのため、コミットメントが因子として抽出されなかったと推測される。しかしながら、コミットメントが抽出されず2因子になったことは、前述にあるように、中学生を対象とした稲葉・森・五十嵐（2010）の研究を指示する結果であり、中学生のハーディネス尺度としては、2因子構造が適当であることが改めて示された。

## 2. 各尺度の性差について

### (1) ハーディネス尺度

ハーディネス得点について、谷本・濱野（1999）や河嶋・東條・松岡・田中（2001）の大学生を対象に行ったハーディネスに関する研究では、性差があったことが報告されている。しかし、中学生を対象とした稲葉・森・五十嵐（2010）の研究では、性差はみられず、成長とともに性差が生じる可能性を指摘している。本研究でも、いずれの下位尺度においても有意な性差はみられず、先行研究を支持する結果となった。

しかし、今回は調査対象が中学1年生と限られており、発達段階を追った検討を行うことはできなかった。今後は、学年差だけでなく、学校段階差なども総合的に検討することが課題である。

### (2) 友人に対する感情尺度

友人に対する感情得点について、榎本（1999）の研究では、中学生において、「ライバル意識」、「葛藤」は男子が強く感じ、「信頼・安定」、「不安・懸念」は女子の方が強く感じていることが報告されている。本研究では、「不安・懸念」において女子の方が強く感じていることが示され、榎本（1999）の主張を一部支持する結果となった。しかし、その他の友人に対する感情では、有意な性差はみられなかった。このような結果になった理由として、先行研究との調査方法の違いが挙げられる。榎本（1999）の研究では中学全学年が対象であるのに対し、本研究の対象は中学1年生に限られている。また、榎本（1999）は質問の対象となる友人を「同性の親しい友人」と限定して調査を行なっている。榎本（1999）の研究で性差が得られた「信頼・安定」「ライバル意識」「葛藤」は、男女共に、身近な親しい友人に対して強く抱く感情であったと考えられるが、本研究では限定がなかったことから、調査対象者が友人全体をイメージして回答し、感情の男女差に緩和がみられたと考えられる。

### (3) 友人適応尺度

友人適応得点については性差がみられ、女子の方が男子よりも友人適応が高いことが示された。Duck（1991）は、「友好的」と思われる行動についての判断には性差があることを指摘しており、男子は親密さを「一緒に何かをすること」と定義するが、女子は親密さを「話題や会話の量」によって定義する傾向があることを述べている。友人適応尺度の質問項目は、「友達と

の会話は楽しいと思う」「気持ちをわかってくれる友達がいると思う」「相談できる友達がいると思う」といった、会話や気持ちの共有に関するイメージが強い項目であった。そのため、女子の方が友人関係において高い適応を感じているという結果が得られたと考えられる。

### 3. ハーディネスと友人に対する感情、友人適応との関連について

#### (1) チャレンジと友人に対する感情との関連

共分散構造分析では、チャレンジから「信頼・安定」、「独立」に正のパス、「葛藤」に負のパスが示された。また、相関分析でも同様の結果であった。これらより、チャレンジが高いほど、「信頼・安定」、「独立」の感情が高くなり、「葛藤」は低くなることが示された。変化や刺激を好み、挑戦したいという信念の背景には、友人に対する被受容感や安心感、自身の明確な意思があると考えられる。これらの点については、後の考察で詳しく述べる。

加えて、「ライバル意識」との相関分析において、弱程度ながら正の相関がみられた。榎本 (1999) は、ライバル意識について、友人に対して負けたくない感情であると述べている。チャレンジ志向が低い人は、色々な経験をしてみたいという気持ちが弱く、自己に対する向上心が低いため、友人より上にいたいとはあまり感じないと考えられる。チャレンジ志向が高まると、色々な経験をして自己を高めたいという意識が芽生え、自尊心も高まる。その結果、周りにいる友人に対して、負けたくないという感情を抱き、ライバル意識を感じやすくなることが考えられる。

#### (2) コントロールと友人に対する感情との関連

共分散構造分析では、コントロールから「信頼・安定」、「独立」、「ライバル意識」について正のパス、「不安・懸念」について負のパスが示された。また、相関分析においては、「信頼・安定」、「独立」、「ライバル意識」との間に正の相関、「不安・懸念」、「葛藤」との間には負の相関がみられた。これにより、コントロールが高いほど、「信頼・安定」、「独立」、「ライバル意識」が高いことが明らかとなった。コントロールは、一定の範囲内で影響を及ぼすことが出来ると信じ、かつ行動する傾向である (Orr & Westman, 1990)。自分が頑張れば何でも出来ると信じ、行動していくからこそ、友人との良好な関係を積極的に築くことができ、自分の意見も言いやすくなると推測される。そして、それと同時にプライドが高くなり、友人に対してライバル意識を抱きやすくなると考えられる。

また、コントロールが低いほど「不安・懸念」、「葛藤」が高くなることが分かった。不安・懸念は、友人との関係を意識し、友人に対して肯定的な受容を望むがゆえに生じる不安の感情である (榎本, 1999)。前述

したOrr & Westman (1990) のコントロールの定義からすると、コントロールが低い者は、自分に自信がなく、周りに影響を及ぼすことが出来ないと感じていると思われる。すなわち、友人を意識し受容を望むが、自分に自信がないため、友人にどう思われているかが気になり、友人に裏切られるのではないかと不安になる。そして、友人の誘いを断れなかったり、友人に対して自分の意見を言うことができなかったりと、葛藤していることが推測される。

### 4. ハーディネスが友人に対する感情を介して友人適応に及ぼす影響

ハーディネスという特性が友人に対する感情にどう影響し、それが最終的に友人適応にどう影響を及ぼすのかという、ハーディネスの友人適応への直接的・間接的な影響を検討した。直接的な影響を見るために、友人適応において、ハーディネスとの相関分析を行った結果、チャレンジが高い者ほど、友人関係に対して高い適応感を持っていることが示された。また、コントロールについても同様の結果が得られた。右高 (2009) によると、中学生で最も大きなストレスになるのは「友」である。ハーディネスとは、高ストレス下で健康を保っている人々が持っている性格特性であり、中学生においてそれが高いことは、友人に対するストレスを感じにくくすると考えられる。したがって、ハーディネスが高い者ほど高い友人適応を示したと言える。

共分散構造分析の結果、チャレンジは友人適応に直接的に影響し、「信頼・安定」や「葛藤」を通して間接的にも影響していることが分かった。ここでも、チャレンジが高い者ほど、友人関係に対して高い適応感を持っていることが示された。また、信頼・安定を介した間接的な影響が直接的な影響より大きかったので、チャレンジから友人適応への影響は、友人に対する信頼・安定が高いことで、より大きく左右されると言える。チャレンジの強い人は、変化を成長の機会として捉えることができる (Orr & Westman, 1990) ので、積極的に友人関係をよくしていこうと働きかけることができると推測される。ゆえに、友人との信頼関係を築くことができ、安定した感情を抱くようになり、友人への適応感も強くなると考えられる。また、「葛藤」は、友人に自分のやりたいことや思っていることを伝えられず、友人との間で自分が確立していないという、友人に左右されてしまう感情である (榎本, 1999)。チャレンジが高く、自分のやりたいことに挑戦したい気持ちが強いほど、自分の意志を明確に持つことができる。そのことにより、友人という存在に左右されず、友人に対する葛藤を感じにくくなり、友人とのコミュニケーションが取りやすくなる。ゆえに、友人への適応感が高まると考えられる。



コントロールは、「信頼・安定」を介してのみ、友人適応に影響を与えることが示された。このことから、コントロールは、友人に対する信頼・安定の感情を持つことで、より友人適応感に大きく影響すると言える。その理由として、前述したとおり、自分が頑張れば何でも出来ると信じ行動するからこそ、友人との信頼関係を築くことができ、その結果、友人に受け入れられているという感覚が得られるということが挙げられる。

友人に対する感情と友人適応の相関のみをみると、「信頼・安定」や「葛藤」の他に、「独立」と友人適応にも関係はみられるが、ハーディネスとの関係も鑑みると、コントロール、チャレンジのどちらにおいても「信頼・安定」の感情を介することで友人適応を高めるという結果となった。

以上のことから、ハーディネスは、友人に対する感情を左右し、結果的に友人適応に影響を及ぼすことが示された。特に、友人に対する信頼・安定の感情を介することで、友人関係への適応感が高まることが明らかとなった。本研究の結果により、ハーディネスが高いことが、友人に対して肯定的な感情を抱きやすくするとともに、否定的な感情を軽減し、中学生の友人関係を良好にすることが示されたと言えよう。

## 5. 今後の課題

以上のように、本研究では、ハーディネスは中学生の友人関係を良好にする効果があることが確認された。

しかしながら、本研究ではいくつかの課題が残されている。1つめは、中学生にとって2因子構造のハーディネス尺度が本当に妥当なのかを追求する必要があることである。その一環として、コミットメントの表現の問題がある。本研究で作成した中学生用ハーディネス尺度のコミットメントの項目内容は、中学生にとって分かりにくかった可能性がある。自己形成の初期段階である中学生にとって、「生きがい」という言葉は馴染みのない概念であったと考えられる。また、予備調査で「自分の勉強を本当に楽しみにしている」を「自分がやりたいことを勉強するのは、本当に楽しい」という表現に修正したが、それでもイメージしにくかった可能性も否定できない。よって、本調査の前に、直接中学生に対しても予備調査を行うなど、さらに中学生が理解しやすい表現を追求し、中学生用ハーディネス尺度の因子構造を明らかにしていく必要がある。

2つめは、ハーディネスの性差について検討するため、発達段階を追った研究を行うことである。今回は調査対象が中学1年生のみであり、性差はみられなかった。よって、今後は学年差だけでなく、学校段階差なども総合的に検討することによって、発達に伴っ

てハーディネスに性差が生じてくることを証明するとともに、どの段階で性差が生じてくるのかということも明らかにする必要がある。そのことによって、ハーディネスの性差が持つ意味をより明確にできるであろう。

## 謝辞

本研究は、第一・第二筆者が実施し、第三筆者が指導した平成23年度愛知教育大学養護教諭養成課程の卒業論文を、加筆・修正したものです。実施にあたり、調査に快くご協力いただきました中学生の皆様、ならびに教職員の皆様心より感謝申し上げます。

## 文献

- Duck, S. 1991 *Friends, for life: The psychology of personal relationship*. 2nd ed. London: Harvester Wheatsheaf. 仁平義明 監訳 1995 フレンドズスキル社会の人間関係学, 福村出版
- 榎本淳子 1999 青年期における友人との活動と友人に対する感情の発達的变化 教育心理学研究, 47, 180-190.
- 古市裕一 1991 小・中学生の学校嫌い感情とその規定因 カウンセリング研究, 24, 123-127.
- 本間友巳 2000 中学生の登校を巡る意識の変化と欠席や欠席願望を抑制する要因の分析 教育心理学研究, 48, 32-41.
- 堀越あゆみ・堀越勝 2008 ハーディネス尺度の構造およびその精神的健康との関連: 中高年と大学生を対象として 順天堂医学, 54 (2), 192-199.
- 稲葉悠・森愛・五十嵐哲也 2010 中学生のハーディネスによるストレス反応低減効果の検討, Iris health, 9, 37-44.
- 井上美美・相模健人 2005 大学生における自己開示傾向とハーディネス性格特性の関連についての研究 愛媛大学教育学部紀要, 52 (1), 89-96.
- 井上史子・沖裕貴・林徳治 2004 中学校における自主性尺度項目作成の試み, 年会論文集, 20, 62-65.
- 河嶋美徳・東條光彦・松岡洋一・田中宏二 2001 ハーディネス・パーソナリティ尺度の作成に関する研究 岡山大学教育学部研究収録, 116, 25-31.
- Kobasa, S.C. 1979 Stressful life events, personality, and health: An inquiry into hardiness. *Journal of Personality and Social Psychology*, 37, 1-11.
- 小坂守孝 1992 ストレス抵抗資源としての実存的性格特性: ハーディネス尺度に関する文献研究 社会学研究科紀要, 35, 29-36.
- 久世敏雄・原田唯司・後藤宗理・宮沢秀次・二宮克美 1982 中学3年生の生活意識に関する一研究, 名古屋大学教育学部紀要. 教育心理学科, 29, 299-319.
- Maddi, S.R. 2002 The story of hardiness: Twenty years of theorizing, research, and practice. *Consulting Psychology Journal: Practice and Research*, 54 (3), 173-185.
- 右高和生 2009 児童・生徒の学校と家庭における生活とストレス—市内小学生と中学生の実態調査の結果から— 中部大学現代教育学部紀要, 1, 179-189.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因: 青年用適応感尺度の作成と学校別の検討 教育心理学研究, 53, 307-319.



- Orr, E., & Westman, M. 1990 Does hardiness moderate stress, and how?: A review. In M. Rosenbaum (Ed.), *Learned resourcefulness: On coping skills, self control, and adaptive behavior*, New York: Springer Publishing company, 64-94.
- 澤田瑞也 1995 人間関係の生涯発達：人間関係の発達心理学 (1) 培風館
- 多田志麻子・濱野恵一 2003 ハーディネス尺度の信頼性と妥当性の検討 ノートルダム清心女子大学紀要. 生活経営学・児童学・食品・栄養学編, **27** (1), 56-62.
- 谷本久美子・濱野恵一 1999 ハーディネスとメンタルヘルスとの関連性—青年男女を対象とした調査研究 児童臨床研究所年報, **12**, 54-61.

(2012年8月2日受理)